

石川県立工業高校

「Color」

2018. 12. 24 上演1

20 人に一人がなると言われている障害、色覚障害を持った青年、蒼^{あおい}。この劇の主人公は色が見えない少年だ。他の人には見えているのに見る事が出来ない色。蒼はどうして自分だけが色を見る事が出来ないのかと自分を追い込んでいく。さらに、この障害は完治することは難しいとされている。そんな中で蒼は同じ病院に入院している患者の麗華と出会い、麗華と、蒼を支えるシキカクレンジャーの4人と一緒に色を識別する訓練を始める。しかし、蒼には「この世の中には見えなくていいものもある。」と言う同じ色覚障害者の父がいた。だが、麗華の命を懸けて行った訓練のおかげで蒼は見なくてもいいものも含めて色と向き合っていく覚悟を決める。

幕が開くとまず、黒と白を基調としたシンプルな舞台装置が目飛び込んでくる。蒼が普段見ているモノクロの世界を観客に見せる効果があったように思う。外側から白、灰色、黒の円形のカーペットは目玉を連想させ、最後の登場人物が色鮮やかな布をその目玉の上に置いていくことで、色と向き合っていく蒼の姿が象徴されていた。

蒼が床に、空中に、描きながらいくシーンでは、音響を使わず地明かりだけにすることで、色を自分だけが感じられない中で1人もがく姿が蒼の孤独感を際立たせていた。ホリゾントを劇中に多用しないことで、蒼が生まれて初めて感じた夕日のオレンジや、海の青を非常に鮮やかなものに見せていた。

普段見ている色がない世界というのは、色が見える人にとってたやすく想像できるものではないだろう。障害を患っていない人は障害者の世界や、感情を完全に理解することは永遠にできない。しかし、この劇を見た観客は色覚障害の人の存在を認知し、興味を持っただろう。それだけではなく、障害者に対しての関わり方についても考えるきっかけになったはずだ。この劇の麗華や、シキカクレンジャーのように周りからの助けがあったからこそ色を感じられた蒼の姿が印象的だった。

その一方で、蒼の色覚障害に対しての両親の考え方の違いには、私たちがこの劇から学ぶべきものがあつた。蒼の母は、障害者としての蒼を受け入れ、できるものなら代わってあげたいと思うほど、その姿は蒼に寄り添うものであつた。一方、父は同じ色覚障害者であり、無理に色なんて知らなくていいと思っている。この2人の考え方に正しいも間違いもないのだろう。もし蒼が色覚障害を克服しなくてもいいと思っていたならどうだろう。色覚障害を克服してほしいと思うことは父が言うとおりのお節介にもほどがある。しかし、蒼は仲間と色と向き合い、刺激を得ることでその目で世界をありのまま見る決心がついた。これを踏まえると、障害者に対して、ただかわいそうだと思ってしまう私たちの考えも見直すべきだと考えさせられた。

石川県立工業高校のみなさん、お疲れ様でした。